

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2471300331		
法人名	株式会社 センチュリークリエイティブ		
事業所名	グループホームあみーご奈垣せせらぎ		
所在地	三重県名張市奈垣1422-5		
自己評価作成日	平成 29年 10月 10日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action_kouhou_detail_2017_022_kihon=true&JigvoNoCd=2471300331-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 29年 11月 1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

立地や環境を生かし、自然のなかでゆったりと個々のペースで過ごしてもらえよう、配慮している。
理念にも掲げている「共感」「尊重」を常に意識して利用者へのかかわりにつなげるよう、職員に指導している。また「地域とのつながり」を大切に、近隣住民ともコミュニケーションをとり、協力を頂いている。
同市内にある2施設とも共同し、長く利用していただける施設を目指している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この事業所は人里からやや離れた場所に建てられているが、そうした環境を活かしながら職員全体の工夫と努力によって意欲的な事業所運営を進めている。例えば、季節や天候を考慮しながら、散歩・畑仕事・外食・花見等、外の空気と触れ合う機会がさまざまに計画されている。また、職員研修の充実と職員会議の活性化によって誰もが話しやすい雰囲気を作られ、職員が楽しく意欲的に仕事に取り組む事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	27年7月より、職員で意見を出し合い、理念を見直した。定期的な会議や勉強会の際にも職員間で再確認し合っている。	共感・尊重・地域という言葉を理念の基本におき、それを説明する文言が掲げられている。それが職員にも分かりやすいと云われており、また利用者と職員が日々の会話をとおして理解と納得し合える関係にもなっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、施設長が例会に参加している。地域の神社のお祭り等には、利用者も参加している。施設開催の運営推進会議にも自治会長や民生委員が参加されている。	山中に建てられ、近隣も少なく、日々に交流する人たちは限られている。それでも神社の祭礼や自治会の行事にできるだけ参加したり、事業所の行事に参加してもらう等の良好な関係が築かれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議には、自治会長や地域の民生委員も参加して頂いている。さらに施設を地域に開放し、住民が気軽に訪れることができる場とし、認知症への理解を求めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設の運営状況の報告と共に、事故や課題を報告し、家族や行政の意見をお聞きしている。その結果を会議等で情報共有し、サービス向上に生かしている。	隔月第3火曜に定例化しているが、本年1月は雪で中止となった。会議は併設グループホームと合同である。テーマでは事故報告の内容がよく議論になる。また、自治会の区長は事業所の有り様を気にかけてくれている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	後見人の利用や施設の空き状況等を地域包括支援センターに相談している。また、2か月に1回、介護相談員の訪問を受け入れ、その結果を確認して改善点等を検討している。	日常的な行政相談は地域保健室が対応、制度的な問題は市役所が対応している。ケアプランに関わることは地域包括支援センターと意見交換しているが、適宜相互に交流しあっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	9月に会社全体で、身体拘束や虐待防止の強化月間とし、資料を使って各施設で勉強会を開催した。言語による拘束等は、職員間でチェックし合っている。玄関は夜間のみ施錠している。	毎月、事業所内部で研修しており、拘束や虐待の他、さまざまなテーマを勉強している。近く県社協から講師を呼ぶ予定である。業務上では、言葉による拘束で気付いたことは業務日誌に書き、職員間で情報共有し、ケアに活かしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	9月に会社全体で、身体拘束や虐待防止の強化月間とし、資料を使って各施設で勉強会を開催した。今後も学びを継続する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人制度を利用する利用者がおられ、定期的に訪問、報告等連携している。制度の理解については研修等への積極的な参加を進めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	納得して施設を利用して頂けるよう、契約書その他の書面について、利用者家族に時間をかけて説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書に、施設内外の苦情相談窓口を明記している。家族や後見人からの意見や要望については、日誌に記載し、内容によっては改善策も併せて記載して情報を共有している。	家族が来れば困ったことや悩みを出してくれるので、事業所にもできること・できないこと、状態の改善はゆっくり時間をかけている等話し合っている。事業所の祭は家族に案内しているが、本年は台風で中止になった。	家族は誕生会や運営推進会議等で来所しているが、家族と事業所がより強く絆を深めるような取組みへの計画や工夫によって何かできないか、検討がのぞまれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議・社員会議で職員からの提案や意見を聞き取り、会社役員との定期的な会議の場で報告している。	職員会議は毎月1回、全員参加で事業の打合せ、カンファレンス、研修等をしている。意見は率直に出し合っている。他に正職員中心の社員会議があり、決まったこと、変わったことはノートに書き全員が確認している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的な会社役員との面談や、自己評価等により、誇りを持って仕事に取り組めるような環境づくり、サポート体制を継続している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の能力や経験に応じて、本人と相談しながら指導期間を決定し、無理なく仕事を覚えてもらえるよう配慮している。資格取得のサポートや、施設内外の研修への参加も勧めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議への参加や、施設見学等により、他事業所職員との交流や情報交換の機会を持っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初回面接時には本人・家族からの聞き取りと共に、在宅の担当ケアマネや、利用中のサービス事業所からも情報を聞き取り、安心して移行してもらえるよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学や入居申込時に、家族の思いや要望などを丁寧に聞き取り、記録している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	担当ケアマネや利用中のサービス事業所と連携し、情報収集している。状態によってはより本人に合うサービスを検討し、提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者ができること、したいことを日頃の会話から認識し、やりにくい部分を援助するという姿勢で、かかわっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の状態によっては家族にも協力してもらい、面会や電話での会話を依頼したり、受診に同席してもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまでのつながりを継続しておられる方は少なくなりましたが、友人が訪問された際にはゆっくり過ごしてもらえるよう配慮している。利用者の希望を聞き、好きな場所への日帰り旅行等も企画している。	地元の理美容院に行ったり、友人の来訪で歓談したり、馴染みの場へのつながりを工夫している。好きな場所への日帰り旅行は家族にも協力を求めたが、台風のため中止となった。女性利用者にメイク等をするると昔の馴染みの話で盛り上がりたりする。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リビングでは、個々の性格や相性に配慮しながら過ごしてもらおう場所を考え、職員が間に入って会話やレクリエーションを楽しんでもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に移動されたり、入院された利用者の状況確認や、家族からの相談に応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話や言動等から、利用者の思いを把握するよう心掛け、気づいたことは日誌に記入して職員間で共有している。必要に応じて会議等で改善策を検討している。	利用者との会話を重視しており、会話からニーズや気持や希望等を把握している。会話から出てきた思いに沿ってやりたいことに一緒に向き合ったり、具体化のために外出の機会を作っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面接時、入居以降も利用者・家族から情報収集し、わかったことは、日誌に記録して職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントにより、利用者個々の現在の健康状態、ADL、生活リズム等の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のモニタリング、見直し時のカンファレンス等で各職種と話し合い、可能であれば利用者・家族にも参加して頂いて意向を確認し、介護計画書を作成している。	モニタリングは毎月、ケアプランは6ヶ月毎(変化あればその都度)に見直している。作成したケアプランは家族に郵送し、署名・捺印をもらう。カンファレンスでは職員全体で議論し、それをケアマネジャーが整理し文書化している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日誌(引継ぎシート)や個別記録用紙に、利用者の様子を記録し、特に日頃と違う状態があれば看護師やリーダーに口頭で報告するよう徹底している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個別レクリエーション、日帰り旅行、散歩等利用者の希望に応じて援助したり、家族の相談に応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	園芸ボランティア、音楽リハビリ、訪問美容等の受け入れ、地域のお祭り等に参加している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今年から訪問診療制度を利用することとなり、殆どの利用者が希望されたが、病状によりこれまでの医療機関を継続している利用者には通院の付添いをしている。	協力医(内科と歯科)が定期的に向診するので利用者は皆受診している。整形外科・皮膚科・眼科と難病受診者は通院するので職員が同行したり、家族が対応している。家族対応でも職員が同行する時もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤と非常勤の看護師を配置し、夜間帯でも電話で状態報告ができるようシステムを確立している。受診が必要と判断した場合は、家族にも連絡し、対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院に対し情報提供し、退院の見込みや退院後の対応について、病院側との連絡を密にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化への対応の指針を説明し、終末期に対する希望を、できる限り確認している。入院や他施設への移動が必要と判断される場合は、家族への相談とともに、利用可能なサービスについて、情報収集し、提案している。	これまでに終末期の看取りをした経験はない。入居契約時に看取りの体制はないことを説明しており、家族は了解済みである。重度化したら、協力医の診断により、入院を勧めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に救命講習や訓練を受ける機会を設けており、継続している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の実践式消防訓練で、消防署からの指導を受けている。災害時には施設が孤立する可能性が高いため、近隣住民との協力関係や備蓄品の整備に努めている。	4月、11月に総合的な防災訓練を行い、救命救急訓練もしている。今年初めて夜間想定訓練もしたが、まだ十分でないかと反省している。火災予防が主眼となっており、災害備蓄は5日分を備えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念である「尊重」を常に忘れずに、否定しない言葉かけを指導し、職員間でチェック合っている。また、職員会議等でも点検している。	トイレの声かけは耳で囁くよう注意している。入浴の際は、脱衣場で待たせないよう順序よく着脱を介助している。いいにくいことをどう伝えるか、職員会議で検討している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	着替えや食事等、利用者の意向を確認しながら援助している。意向を確認しにくい利用者に対しては、表情や仕草を確認するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れは決まっているが、利用者の好みや体調に合わせて個々のペースで過ごしてもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類を適切に選べる利用者が少なくなっているが、できるだけ自己決定できるよう、配慮している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立表を掲示し、食事前にお知らせしている。食事準備や盛付、片づけ等、利用者の希望を聞きながら職員と共に行っている。	食事は本年8月より、給食業者の冷凍食品を導入し、事業所はお湯やレンジで温めている。毎月1日は赤飯の日にして喜ばれており、誕生会は本人の好みで食事を用意している。卵料理・味噌汁・おやつは手作りしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の好みや摂取状況を記録し、硬い物は小さめにカットするなど、食べやすい工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声掛けにより、歯みがきやうがいを援助している。義歯洗浄や管理等、一人ではできない部分は職員が介助する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄の間隔やパターンを知るため記録をとり、早めのトイレ案内で失禁を防止したり、夜間はおむつ交換の利用者にも日中はトイレに行ってもらえるよう、声かけしている。	排泄チェック表で確認し、布製・リハパン・パット等その人に合ったパンツを勧めている。ポータブルトイレを使わず、トイレ利用を基本としている。便秘対策は医師の指示により、適切に支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便間隔を把握し、看護師に報告しながら、服薬や腹部のマッサージ等、不快感が続かないよう配慮している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の予定はある程度決まっているが、その日の気分や体調により、臨機応変に対応している。入浴を好まない利用者については、着替えや清拭、シャワー等から慣れてもらうよう配慮している。	浴槽は1人用で、1日に4人、週3回は入浴できるよう交代制にしている。午後を入浴時間にしており、嫌がる利用者もいるが、誘いかけ次第で入浴している。ほとんどの利用者は着替えに介助を要するので支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室は一人でくつろげる場所であるが、好まない利用者もおられる。共有スペースであるリビングのソファでなら安心して過ごされる利用者もある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎食後、確実に服薬できるよう、チェック表等も作成している。体調変化などに合わせ、早めに医師に相談し対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者個々の好みや得意な事を活かし、レクリエーションや作業のお手伝い等、利用者と一緒に取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望する場所への外出の企画をしている。家族と外食や墓参りに行かれる方もおられる。日頃は施設周辺の散歩や施設前の畑を見に行くなどの支援をしている。	日常は季節や天候を考慮しながら、買い物・花見・外食・同一法人内ホームの交流会等、さまざまな状況に応じて外出の機会を工夫している。また適宜散歩に出たり、畑に出たり、自然に触れるよう工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理ができる利用者はおられないが、買い物や外出時には、可能な利用者には自分で支払ってもらうよう声かけしている。外出が困難な利用者の必要物品は職員が買い物代行する。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙のやりとりをしている利用者はおられないが、希望があれば職員が取り次ぎ、援助する。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	山間部にあるログハウスという自然豊かな環境で、日中はほとんどの利用者が共用のリビングで過ごす。個々のペースで好きな時に自室に戻る利用者もある。自室がわかりにくい利用者の居室には目印をつけている。	ログハウスのため、木のぬくもりを感じさせる。利用者は皆、昼は食堂兼ホールに集まって過ごしており、そこで洗濯物をたたむなど共通作業に取り組んでいる。以前は手芸品造りもしたが、難しくなった。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事の際は席が決まっているが、その他の時間帯は、個々のペースで好きな場所で過ごしておられる。食事や行事以外は自室で過ごすのを好む利用者もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や衣類、小物等を持ち込んでいただくよう、家族にお願いしている。仏壇を置いておられた利用者もあった。	ベッド・エアコン・小タンスは事業所が用意し、あとは各自が持ち込んでいる。部屋の名札はそれぞれ個性がこもっている。部屋に閉じこもる人はなく、自宅では閉じこもった利用者も半年後は皆と動き始めた例もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者個々のADLに合わせ、椅子の形態や、席等を決めている。自室や自席からトイレまでの距離等にも配慮している。		